

根張りと受光態勢を良好にし  
光合成効率を上げる小麦づくりを！

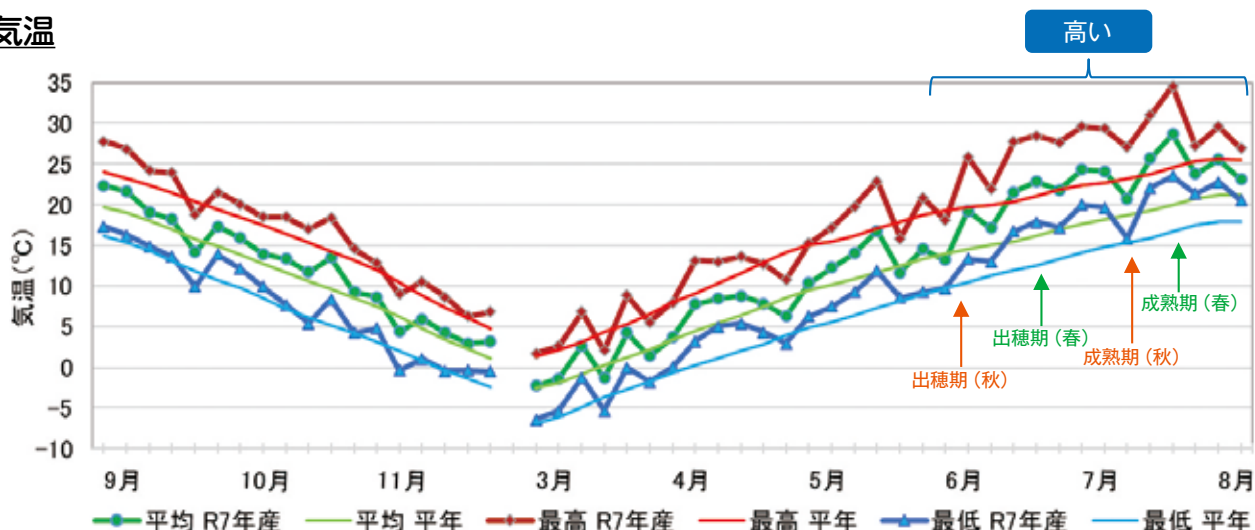
# 令和7年産 小麦の作柄を振り返る ～各地域における最大収量を目指して～



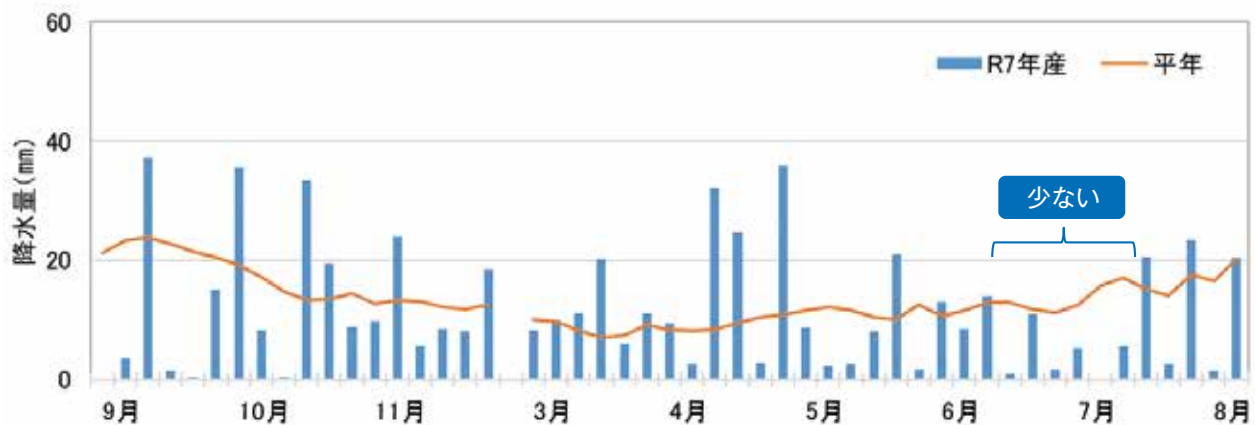
令和8年1月発行

# 令和7年産の気象経過

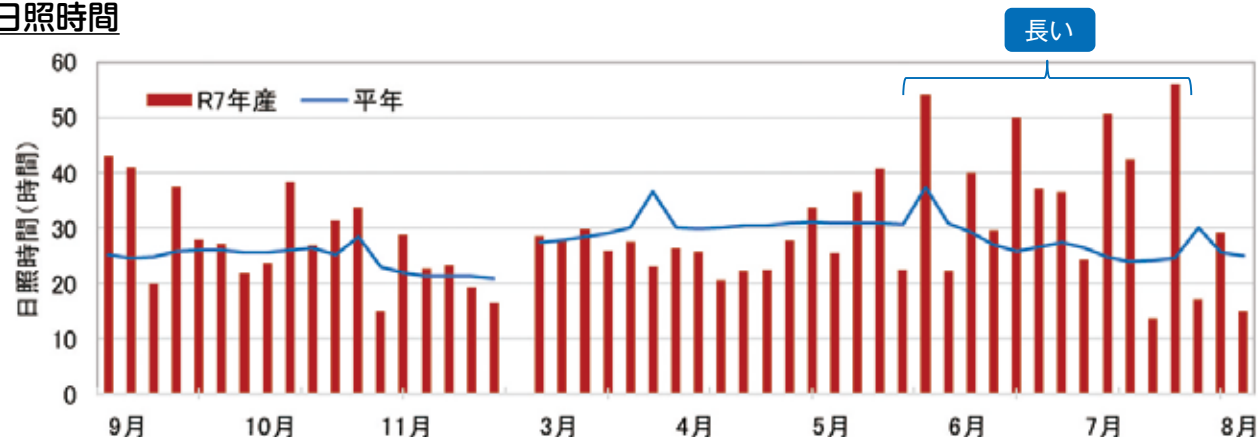
## 気温



## 降水量



## 日照時間



注1) 気温、降水量、日照時間は気象庁の官署地点(帯広、網走、札幌)のアメダスデータ平均値

注2) 収穫期、成熟期は北海道農政部定期作況報告全道平均値、(秋)は秋まき小麦、(春)は春まき小麦

## 《気象概要》

越冬前の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並に経過しました。3月以降、気温は高く経過し、特に6～7月にかけて著しい高温となりました。降水量は4月の中下旬に多く、5月上中旬と6月中旬～7月上旬にかけて少なくなりました。日照時間は3月中旬～5月上旬にかけて少なくなりましたが、一転して5月中旬～7月下旬にかけて多照となりました。

登熟期間中(収穫期～成熟期)の気象は平年と比べて、秋まき小麦では、積算平均気温129%、積算降水量70%、積算日照時間138%、春まき小麦では、積算平均気温132%、積算降水量56%、積算日照時間144%となりました。 注) 平年比は上記3地点の平均値による



# 令和7年産 秋まき小麦 生育経過と収量・品質の特徴

## 《令和7年産 秋まき小麦の生育概要》

振興局	は種期	出芽期	起生期	幼穂形成期	止葉期	出穂期	成熟期	登熟日数	穂数本 / m <sup>2</sup>	稈長 cm	穂長 cm
空知	9/18 (9/15)	9/27 (9/22)	4/4 (4/2)	4/29 (4/28)	5/22 (5/22)	6/1 (5/31)	7/9 (7/13)	38 (43)	738 (741)	78 (77)	9.2 (9.2)
上川	9/12 (9/12)	9/22 (9/21)	4/11 (4/9)	5/5 (5/4)	5/25 (5/25)	6/4 (6/4)	7/12 (7/16)	38 (42)	707 (692)	76 (80)	8.6 (9.0)
オホーツク	9/22 (9/22)	9/30 (9/29)	4/9 (4/3)	5/4 (5/1)	5/28 (5/27)	6/7 (6/7)	7/14 (7/21)	37 (44)	807 (854)	79 (79)	8.8 (9.0)
十勝	9/23 (9/24)	9/30 (9/30)	4/4 (3/28)	5/1 (4/29)	5/25 (5/24)	6/4 (6/2)	7/12 (7/20)	38 (48)	756 (709)	83 (79)	8.8 (9.0)
全道	9/20 (9/20)	9/28 (9/27)	4/6 (4/1)	5/1 (4/29)	5/25 (5/24)	6/4 (6/3)	7/12 (7/18)	38 (45)	766 (755)	81 (79)	8.8 (9.0)

※北海道農政部定期作況報告から引用。( ) 内は平年値。

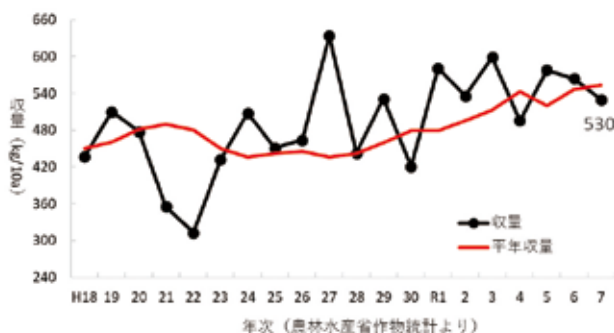
## 《生育経過》

は種期は平年並で、出芽は良好でした。は種後は気温が平年より高く経過したことから、過繁茂なほ場が見られました。

令和7年3月の気温は平年より高く経過しましたが、融雪は平年並～やや遅れ、起生期は平年より5日遅くなりました。4月の気温は平年より高く、5月はかなり高く経過したため、幼穂形成期は2日遅れ、止葉期、出穂期は1日遅れとなりました。収量への影響が大きい登熟期間(出穂期～成熟期)は、かなりの高温と少雨傾向であったことから、成熟期は6日早まり登熟日数は38日と平年より7日短くなりました。成熟期の稈長、穂長、穂数は平年並でしたが、穂数が多いほ場では倒伏が見られました。

病害では、雪腐病の発生は平年より少なく、菌種別では紅色雪腐病または雪腐褐色小粒菌核病の割合が高い傾向でした。赤さび病の発生は平年より早く、発生量は平年並でした。赤かび病は平年より少なく、うどんこ病は平年並でした。眼紋病は平年よりやや多くなりました。コムギなまぐさ黒穂病の発生面積は、平成28年と比較して大幅に減ったものの、一部で発生が見られました。各地でコムギ縞萎縮病の発生が目立ち、病徴は例年より早くから見られました。

## 《秋まき小麦 収量の推移(全道平均)》



## 《秋まき小麦 品質の推移(全道平均)》

### 「きたほなみ」

項目	R3	R4	R5	R6	R7	基準値	許容値
容積重 (g/L)	862	852	857	860	849	840 以上	—
FN (sec)	400	413	410	416	400	300 以上	200 以上
タンパク (%)	10.7	12.1	10.8	11.0	11.2	9.7 ~ 11.3	8.0 ~ 13.0
灰分 (%)	1.37	1.46	1.38	1.39	1.44	1.60 以下	1.65 以下

### 「ゆめちから」

項目	R3	R4	R5	R6	R7	基準値	許容値
容積重 (g/L)	858	837	846	856	847	833 以上	—
FN (sec)	456	443	461	472	447	300 以上	200 以上
タンパク (%)	14.0	15.0	13.6	13.8	14.2	11.5 ~ 14.0	10.0 ~ 18.0
灰分 (%)	1.63	1.69	1.63	1.63	1.67	1.75 以下	1.80 以下

注1) きたほなみ、ゆめちからともホクレン扱い分  
R7は北海道農産協会調べ(令和7年11月28日現在)  
注2) 項目別加重平均値

## 《収量・品質》

収量は、全道平均で530kg/10a(平年比96%)と平年を下回りました。1等麦比率は90%で、品質面では、「きたほなみ」はすべての項目が基準値内となり、「ゆめちから」では、タンパクが基準値をわずかに超えましたが、他の項目は基準値内となりました。

## ポテンシャル収量（試算例）

ポテンシャル収量<sup>注1</sup>とは、登熟期間における当年の気温・日射条件下で達成可能な最大収量を表すものです。小麦作付面積が多い4振興局における「きたほなみ」のポテンシャル収量を試算しました。

注）土壌水分の影響は考慮されていません

$$\text{ポテンシャル収量 (t/ha)} = 7.73 \times \text{日射気温比 (MJ/m}^2/\text{℃)}$$

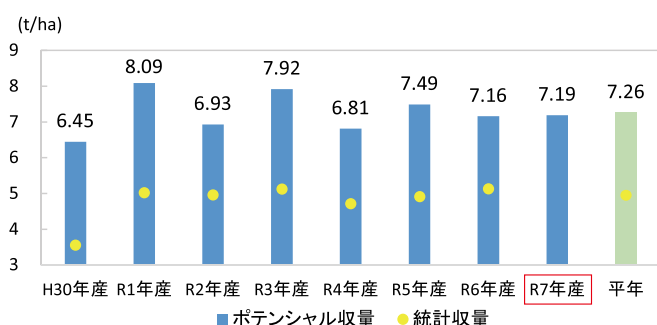
### 【使用するデータ】

登熟期間（出穂期～成熟期）の日射量（MJ/m<sup>2</sup>）※、平均気温（℃）の平均値

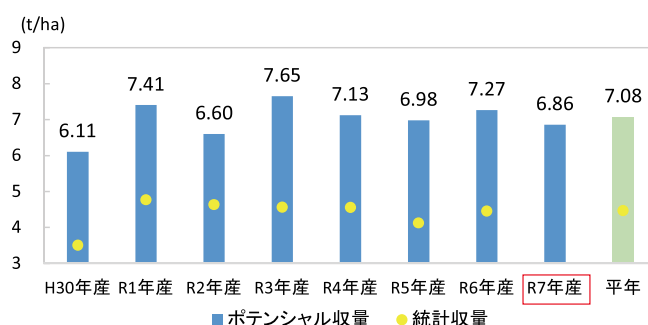
※日射量は、気象庁では札幌、旭川、帯広、網走など限られた官署地点でのみ観測されている。各アメダス地点では「NARO モデル結合型作物気象データベース（MeteoCropDB）」より日射量推定値を入手するが、単位が（W/m<sup>2</sup>）なので、0.0864 を乗じて（MJ/m<sup>2</sup>）に換算してから上記の計算式で使用する。

「気象情報および作物モデルを用いた秋まき小麦の生育収量変動の評価・予測法」（平成30年北海道指導参考事項）

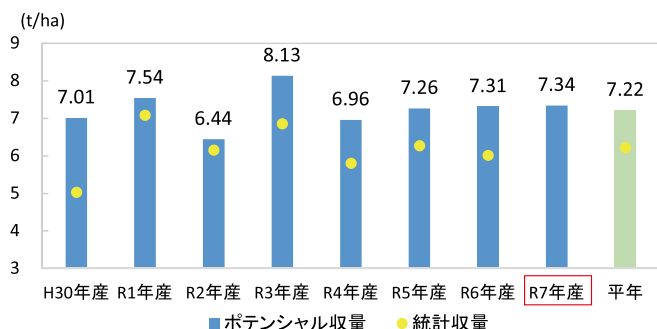
### 空知試算例



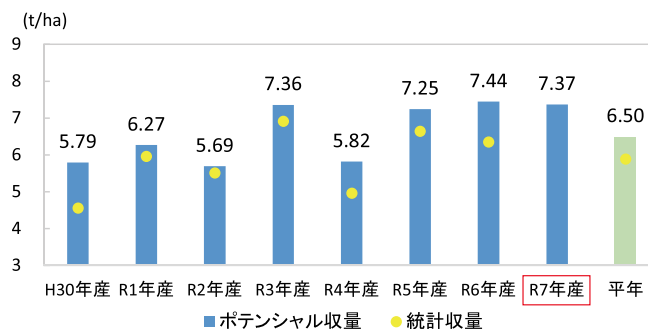
### 上川試算例



### オホーツク試算例



### 十勝試算例



注1）日射気温比は、空知は長沼、上川は旭川、オホーツクは北見、十勝は帯広における NARO モデル結合型作物気象データベース 日射量推定値と気温、北海道農政定期作況報告の各地域における生育期節を用いて算出した

注2）統計収量は北海道農政事務所公表の振興局別の収量

注3）「平年」は、過去7年間の収量のうち、最高年、最低年を除いた5年の平均値

令和7年産のポテンシャル収量は、平年比で空知 99%、上川 97%、オホーツク 102%、十勝 113%と試算されました。

登熟期間はかなりの高温でしたが、日射量が多かったことから、いずれの地域でも平年並～平年以上の収量が期待できる登熟条件であったと言えます。特に、十勝地方は日射量が平年より多く、平年を上回る収量が期待できる登熟条件でした。

## 先行降雨指数（試算例）

前頁のポテンシャル収量は土壌水分の影響が考慮されていません。そこで4振興局の登熟期間（6～7月）における先行降雨指数を試算し、土壌水分の状態を検証しました。

先行降雨指数（API）とは、n 日前の日降水量を n で除した値の積算値です。本資料では以下の式（注）で試算しました。

$$API(n) = \frac{P_1}{1} + \frac{P_2}{2} + \dots + \frac{P_n}{n} = \sum_{i=1}^n \frac{P_i}{i}$$

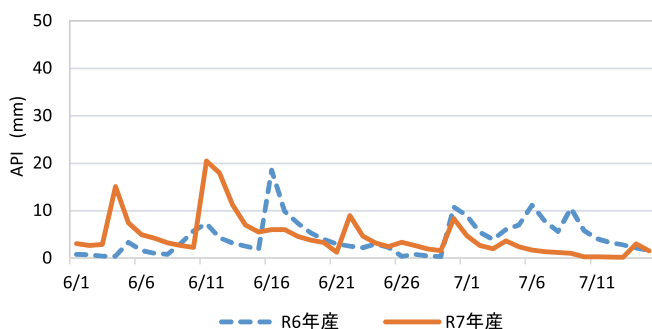
P: 日降水量 (mm)    i: 降雨後の任意の日数  
Pi: i 日前の日降水量 (mm)    n: 遡る日数

例えば、ある日に降水量 20mm の降雨があった場合、それ以前の降雨により土壌が元々多湿であった時と、しばらく降雨がなく土壌が乾燥していた時とでは、土壌の水分状態に及ぼす影響は異なります。

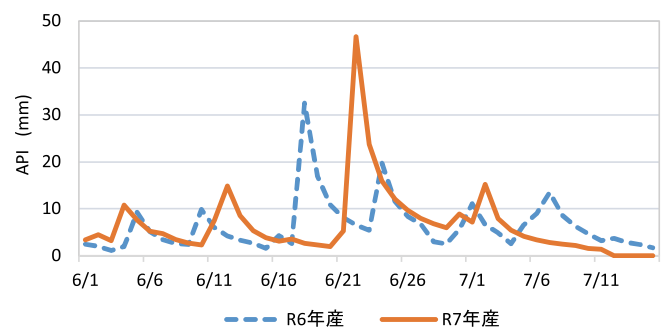
API は当日だけではなく過去（本資料では当日を含む前 10 日間とした）の降水量も反映した指数のため、土壌水分の状態をイメージしやすい値と言えます（高いほど湿潤、低いほど乾燥）。

注）参考文献：「東アジアにおける森林動態観測ネットワークを用いた森林炭素収支の長期変動観測」（国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所、国立研究開発法人国際農林水産業研究センター）

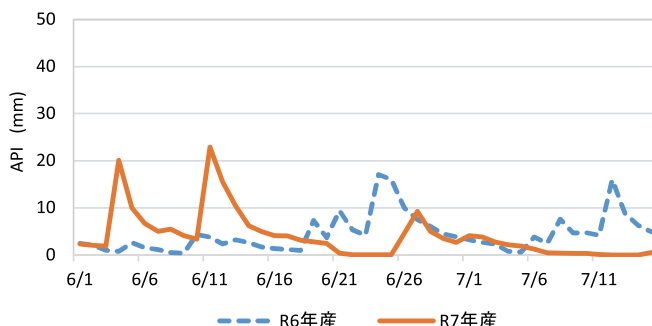
空知試算例



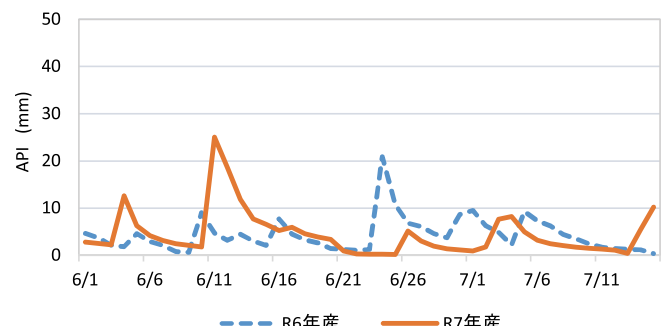
上川試算例



オホーツク試算例



十勝試算例



注）空知は長沼、上川は旭川、オホーツクは北見、十勝は帯広のアメダス日降水量を用いて算出した

秋まき小麦の登熟期間にあたる6月1半旬～7月3半旬の積算降水量平年比（長沼、旭川、北見、帯広の平均）は、令和6年産が59%、令和7年産が59%と同等でいずれも少雨でした。

先行降雨指数試算による令和7年産の土壌水分は、令和6年産に比べて、6月上旬で高く7月上旬以降少ない傾向となりました。地域別では、上川は局地的な降雨により6月5半旬の土壌水分が高くなりましたが、いずれの地域も平年に比べて降水量は少なく（長沼51%、旭川78%、北見53%、帯広54%）、秋まき小麦の登熟期間中は土壌の乾燥ストレスを受けやすい条件であったと推察されます。

## 秋まき小麦 作柄に影響した主要因

### 収量・品質が良好な地域・ほ場

#### 1 赤さび病被害の減少

有効な薬剤を用い防除を実施したことで、止葉を含む上位3葉を健全に保ち、早期枯凋を防いだことが収量・品質に寄与したと考えられます。

#### 2 土壌水分ストレスの軽減

令和7年産では、土壌条件やほ場による収量・品質差が見られました。作物の根張りが良かったほ場では、少雨による土壌水分ストレスが緩和され、収量・品質に寄与したと考えられます。

### 収量・品質が不良な地域・ほ場

#### 1 赤さび病による早期枯凋

赤さび病に罹病して早期枯凋したことが、収量品質に影響したと考えられます。

#### 2 茎数・穂数過多による倒伏

茎数・穂数過多のほ場では、倒伏や登熟期間の短縮により細麦傾向となりました。

#### 3 コムギ縞萎縮病等の土壌病害

コムギ縞萎縮病は近年拡大傾向にあり、症状が激しかったほ場では収量・品質に影響したと考えられます。また、コムギ萎縮病や立枯病、眼紋病の発生も見られました。



赤さび病の蔓延したほ場



倒伏が発生したほ場

## 秋まき小麦 今後に向けた栽培のポイント

#### 1 発生状況に応じた赤さび病防除

赤さび病は近年多発傾向にあります。一部地域では抵抗性“強”の「ゆめちから」において早期枯凋に至る事例があり注意が必要です。発生状況に応じて、次ページ図を参考に適期に薬剤散布を行いましょう。



《赤さび病の防除適期》「多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除技術」（令和6年北海道指導参考事項）より

月		3月			4月			5月			6月			7月			8月	薬剤の選択
旬		下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上			
生育経過		起生期 ●			幼穂形成期 ●			止葉期 ●		出穂期 ●		乳熟期 ●			成熟期 ●			
防除	①赤さび病リスク高 道央など	<div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div></div> <div>＜初発＞</div> <div>（次葉展葉期～止葉期）（開花始め）</div>															1回目：インビルフルキサム水和剤F4000倍 フルキサピロキサド水和剤F2000倍（次々葉に病斑を認めない場合） 2回目：キャプタン・テブコナゾール水和剤F500倍、プロチオコナゾール水和剤F2000倍	
	②赤さび病リスク低 オホーツクなど	<div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div><div>●</div></div> <div>＜初発＞</div> <div>（止葉期）（開花始め）</div>															1回目：インビルフルキサム水和剤F4000倍、フルキサピロキサド水和剤F2000倍、プロピコナゾール乳剤2000倍 2回目：①と共通	

《注》少発生で「リスク低」であった地域においても、令和7年産では多発した事例がありました。そのような地域では、「リスク高」での対応を検討してください。

## 2 適期・適量は種、適度な窒素追肥による茎数・穂数管理

は種量や窒素追肥量が多すぎると過繁茂となり、穂数過多による倒伏や受光態勢悪化による細麦のリスクが高まります。適正穂数確保のためには、適期・適量は種や「きたほなみ」では地域や起生期の茎数によりますが、幼穂形成期重点追肥が有効です。

## 3 コムギ縞萎縮病の発生軽減

耕種的防除として、小麦の連作・過作を避ける、早播きを避ける、土壌水分の多いほ場では排水対策を講じる、抵抗性品種を使用する等基本技術の励行が重要です。また、トラクタ作業で病土が拡散する恐れがあるので、農機具の洗浄や発生ほ場の作業を最後に行うよう留意しましょう。

## 4 土壌水分ストレスの緩和対策

近年、極端な少雨や集中豪雨に遭遇する機会が増えています。心土破砕、有機物施用による保水性改善等の対策を実施し、作物の根張りを良好にすることが重要です。特に、有効土層が浅い水田転換畑等では乾湿害を受けやすいため、十分な対策を講じましょう。

## 5 水田転換畑における給・排水技術の活用

### ○ハイブリッド水路の活用

ほ場内明渠と額縁明渠を設置することで、多雨時の排水促進、少雨時の水分供給の両方に対応できる技術です。集中管理孔を有する暗渠がない水田転換畑でも、6月の少雨乾燥時は本技術により給水することが可能です。

### ○地下灌漑の活用

集中管理孔を有する暗渠がある水田転換畑では、6月の少雨乾燥時は地下灌漑による水分供給を検討しましょう。

下記の北海道 農村設計課ウェブサイトにて、集中管理孔利用に向けた情報発信をしているため、参考にしてください。

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/ski/nn/shuchukanri.html>



秋まき小麦の重点給水期間は6月初めから6月末（乳熟期前）です。過去の降水量と10日間天気予報または週間天気予報を毎日確認し、効果的な給水をしてね！



しゅうちゅうがんりくん

# 令和7年産 春まき小麦 生育経過と収量・品質の特徴

## 《令和7年産 春まき小麦の生育概要》

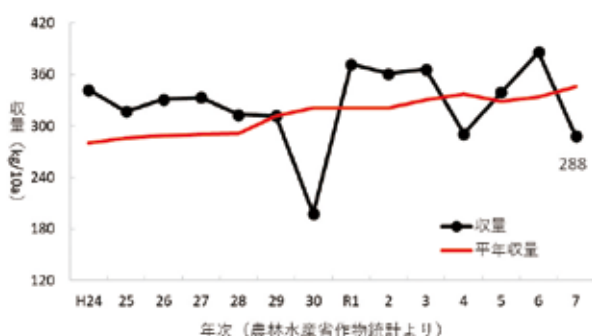
振興局	は種期	出芽期	止葉期	出穂期	成熟期	登熟 日数	穂数 本/m <sup>2</sup>	稈長 cm	穂長 cm
全道 (春まき)	4/22 (4/15)	5/2 (4/26)	6/11 (6/8)	6/20 (6/19)	7/23 (7/29)	33 (40)	641 (678)	81 (83)	8.7 (8.6)

## 《生育経過》

は種期は、降雨の影響で平年より7日遅くなりました。5～6月の気温は平年よりかなり高く経過し、止葉期で3日遅れ、出穂期で1日遅れとなりました。出穂期以降、高温により登熟が進み成熟期は6日早く、登熟日数は33日と7日短くなりました。登熟期間（出穂期～成熟期）にかなりの高温と少雨に遭遇したことで子実の充実が悪いほ場が目立ち、降雨後の収穫では子実の退色も見られました。成熟期の生育は平年に比べて、稈長は短く、穂長は平年並、穂数は少なくなりました。

病害は、赤かび病の発生は平年より少なく、ムギキモグリバエの発生は平年並でした。

## 《春まき小麦 収量の推移（全道平均）》



## 《春まき小麦 品質の推移（全道平均）》

「春よ恋」

項 目	R3	R4	R5	R6	R7	基準値	許容値
容積重 (g/L)	859	848	850	851	838	833 以上	—
FN (sec)	427	413	434	430	423	300 以上	200 以上
タンパク (%)	12.2	13.0	12.9	12.3	13.1	11.5 ~ 14.0	10.0 ~ 15.5
灰分 (%)	1.58	1.69	1.67	1.63	1.70	1.75 以下	1.80 以下

注1) ホクレン扱い分

R7は北海道農産協会調べ（令和7年11月28日現在）

注2) 項目別加重平均値

## 《収量・品質》

収量は、全道平均で288kg/10a（平年比83%）と平年を下回りました。1等麦比率は63%で、特に「春よ恋」で58%と低くなりました。一方で品質面では、「春よ恋」においてすべての項目が基準値内となりました。

## 春まき小麦 作柄に影響した主な要因

- 1 は種時期の遅れ → 生育期間の短縮 → 低収量
- 2 生育期間の高温・少雨 → 子実の充実不足 → 低収量
- 3 収穫時期の降雨 → 退色粒の発生 → 外観品質低下

## 春まき小麦 今後に向けた栽培のポイント

- 1 適期は種による生育量の確保
- 2 土壌水分ストレスの緩和対策(秋まき小麦と同様)
- 3 水田転換畑における給・排水技術の活用(秋まき小麦と同様)
- 4 適期収穫



収穫時期の降雨に遭遇したほ場で発生した「春よ恋」の退色粒（1等麦（左）、規格外（右））

執筆：北海道農政部生産振興局技術普及課（農業研究本部駐在） 主査（普及指導） 八木 登喜子

一般社団法人 北海道農産協会 <https://hokkaido-nosan.or.jp>